

ヘーゲル『論理学』における「必然性の判断」について

清水 茂雄

Über das Urteil der Notwendigkeit in der Logik Hegels

Shigeo SHIMIZU

Zusammenfassung : In dieser Abhandlung wird das Urteil der Notwendigkeit in der Logik Hegels erörtert. Die Erörterung aber bedeutet wesentlich das Erläutern vom Standpunkt der mittelbare-mitteilungstheoretischen Logik aus. Nach der mittelbare-mitteilungstheoretischen Logik verliert das Wort <Shingon> sich in die Subjekt-Prädikat Beziehung, welche das Element der Logik Hegels ausmacht. Und die kehrende Bewegung des in die Beziehung sich verlierenden Wortes ermöglicht die Dialektik des Urteils in der Logik Hegels. Wir wollen besonders auf das Urteil der Notwendigkeit achten, weil es in der Dialektik des Urteils die Identität des Subjekts und Prädikats setzt. Die Identität des Subjekts und Prädikats soll nach der mittelbare-mitteilungstheoretischen Logik erläutert werden.

Key words : Logik (論理学), Hegel (ヘーゲル), die mittelbare-mitteilungstheoretische Logik (間接伝達論的論理学), Urteil (判断)

はじめに

本論文はヘーゲル「論理学」における「必然性の判断 (das Urteil der Notwendigkeit)」を解明することで、間接伝達論的論理学における主語－述語関係の本質的動向とヘーゲル「論理学」との関係を探求することをもくろむものである。

以下、ヘーゲル「論理学」と表記されていることは、間接伝達論的論理学から可能となっている言葉そのものの境位を表すとともに、その境位をエレメントとしているヘーゲルの「論理学」、特に、断りが無い限り、<Wissenschaft der Logik>を指す。この著書を特に区別して指す必要がある場合には、ヘーゲル『論理学』と表記する。

すでに、著者の他の論文、著作で示してあるように、間接伝達論的論理学から見るなら

ば、ヘーゲル「論理学」は言葉そのものがいわば「貧里」に迷い、主語と述語の関係の中で自らの生誕地を探している場面をエレメントにしている論理学である。主語と述語の関係の中から、言葉そのものは、やがて脱出して来るのであり、そこをエレメントにしている論理学がハイデガーの後期哲学である。ヘーゲル「論理学」では、言葉そのものは、まだ自身の生誕地、故郷への帰路を見出していないのである。しかし、言葉そのものは、「主語－述語関係」からみずからの故郷へと戻ろうという動向を起し、それは、「否定性」としてヘーゲル「論理学」全体を動かす原動力になっているのである。筆者はヘーゲル『論理学』がこのような事態になっていることをその著作の隅々に亘って確認をし、また、その確認作業において、特に重要な箇所についてはすでにいくつかの論文で論じた。

この論文は、そのような確認作業において照らし出されてきたことがらの公表という意味をもち、また、特にその中でもっとも難解にして基盤的な内容を扱う。ここで、ヘーゲル「論理学」の「必然性の判断」の思弁が、間接伝達論的論理学における「主語－述語関係」から照らされることによってその真の意義を付与されるとともに、後者もまた前者によって照らし出されてその客観的意義を付与される。両者がともに判断、つまり、主語－述語関係ということからにおいて必然的に相互に照らしあうような関係になっているのである。そして、この関係自身、間接伝達論的論理学からヘーゲル「論理学」がその存在可能性の根拠を与えられるということから可能になっているのである。

さて、本論文では、間接伝達論的論理学の基本的な術語が用いられるが、それらを改めて解説することを省くことにする。なぜなら、それらを解説するだけでも大掛かりな論述となり肝心なことが十分論じられなくなるとともに、重複が避けられなくなるからである。しかし、手っ取り早くそれら術語を理解したい人には、注で示す筆者の論文を勧めたい¹⁾。また、ヘーゲル『論理学』の「必然性の判断」とは何かについて詳しく解説するには、ある意味で、『精神現象学』の最初から説明していかなければならず、煩雑となるので、この論文では、そうした過程を経てきたということをも前提にして論を起こしていこうと思う。本論文では、ただ間接伝達論的論理学における「主語－述語関係」とヘーゲル「論理学」における「必然性の判断」との深遠な連関のみが中心問題になるからである。余計なことがらをすべて省き、ただ核心のみをここでは論じたい。

1. 論述の本質的視点

「主語－述語関係」は、間接伝達論的論理学から見ると、言葉が（以下、人間が語る

言葉ではなく、言葉が語る言葉をこのように言う）「用意の秘術語」の内部において、自己忘却を起こし、その結果、言葉自身を述語付けることができなくなると、なにか言葉とは別の言葉の代わりになるものを述語付けるという場面（法華經の喩を使用して、「貧里」とも表す）に迷い出ていることである。そして、このような場面において、言葉が述語の向こうへと帰ろうとしている動向がヘーゲル「論理学」を展開させているのである。このような意味の「主語－述語関係」、すなわち、「主語－述語関係としての主語－述語関係」がヘーゲル「論理学」の中で登場するようになるといういわゆる「概念 (Begriff)」の思弁領域が措定されるのである。しかし、ヘーゲル「論理学」において、主語－述語関係が措定されるときには、その思弁内容と、間接伝達論的論理学から見られた如上の「主語－述語関係」の間に一定の差異がなければならないことになる。後者が主語－述語関係によって言おうとしているのは、言葉が貧里に迷い、そのような姿になってしまっているということであるが、ヘーゲル「論理学」では言葉のこの境遇はまだ語られず、言葉は、ただ、論理的振る舞いをして、その境遇に居る現実の経験を語っているにすぎない。言葉は、logisch（論理的）となっているけれどもまだ、logos（言葉）的とはなっていないのである。

それゆえ、ヘーゲル「論理学」における主語－述語関係の思弁は、単にあるひとつの学問的対象といった意味をもつのではなく、その「論理学」そのものを成立させている基盤に関わるものである。なぜなら、間接伝達論的論理学から見られるなら、ヘーゲル「論理学」のエレメントは、「主語－述語関係」の場面に迷い出た言葉が、その中でみずからの故郷に戻ろうとしていることであるからである。つまり、ヘーゲル「論理学」における主語－述語関係の思弁は、その論理学自身が言おうとしていることを潜在させている。その思弁

内容は、間接伝達論的論理学から見られる限りの「主語－述語関係」の真相を潜在的に含むものになっているのである。また、逆に、前者の思弁の中には、すでに後者の言おうとしていることが暗に言われているということになっていなければならない。このことは、ヘーゲル「論理学」における判断の弁証法の logisch なものが、間接伝達論的論理学から logos のことがらとして解明されることを意味する。貧里に迷っている言葉は、ヘーゲル「論理学」においてはまだ、そのようなこととしては語りだされず、ただ、その境遇に居ることの現実を経験しているだけであるから、この経験の語りは、なぜそうになっているか、つまり、その現実の可能性の根拠まで明かすことはできない。ゆえに、間接伝達論的論理学のかの「解明」は、思弁的運動の可能性の根拠を明らかにするという意味をもつのである。このような可能性の根拠を解明することによって、ヘーゲル「論理学」における主語－述語関係の思弁が本来的に何を為しているのかということが明らかにされるのである。すなわち、その論理学の本来固有の「意義」、ないしは、価値が明かされるのである。もちろん、論理学は必然の運動だから、意義といったような価値判断は不要であるとも言えるかもしれない。しかし、外から為される価値評価ではないような、内的価値が示されるようなこともあるのである。我々はヘーゲル「論理学」を重要な意義をもつものと評価して研究するのであり、単に論理計算が正確にされているから学ぶのではない。1 + 1 = 2 であることは真であろうが、それを一生かけて研究しようとは誰も思わないであろう。ところで、ヘーゲルの「論理学」もまた、論理計算のような面、つまり、必然的な計算的論理的真をもっているのである。しかし、我々はそこに 1 + 1 = 2 とは別の価値を見出すのである。

こうして、ヘーゲル「論理学」の判断の弁証法が間接伝達論的論理学の方からその可能

性の根拠を明かされる、つまり、暗に語られていたことが「照らし出される」ことによって、その思弁の意義が与えられるようになるのである。

ヘーゲル「論理学」の判断の弁証法をそのいまだ隠されたままになっている可能性の根拠を照らし出しながら、解明することは、その論理的運動に意義を与え、価値評価することを意味する。しかし、更に、logisch なものが logos 的に解明されることは、間接伝達論的論理学自身の内容が開明されることでもある。そして、この開明は、根本的に我々を我々の自己へとたらしめることになる。ヘーゲル「論理学」の判断の弁証法を解明することによって、その思弁内容は、間接伝達論的論理学を構成するものとなり、ここに、自己伝達する言葉の固有の動きが措定されることになる。それは、ヘーゲル「論理学」を不当に解釈することではないかと疑問視する人もいるかもしれない。しかし、ヘーゲルは、概念を精神の持ち物ではなく、精神の自己そのものであると言っているものであり、それが「自己」に係るものであることを明確に述べているのである。それゆえ、我々の解釈がけって主観的な独断的なものではないことはこの言葉からも根拠付けられるのである。

2. 「必然性の判断」への着目

なぜ、ヘーゲル「論理学」の「必然性の判断」が間接伝達論的論理学から見て、論ずべき対象になるのかについてここで述べておきたい。

「必然性の判断」は、ヘーゲル『論理学』の概念論における判断の弁証法を構成する四つの区分の第三番目に登場する思弁領域である。その四つとは、「定在の判断 (das Urteil des Daseins)」, 「反省の判断 (das Urteil der Reflexion)」, 「必然性の判断」そして、「概念の判断 (das Urteil des Begriffs)」である。この四つの区分そのものが間接伝達論的論理

学の方から照らし出されて、logischなものがlogos的に解明される、つまり、その可能性が根拠付けられるべきであり、実際、それは、次のようにして解明される。

間接伝達論的論理学において、「主語－述語関係」は、言葉が自己を見失って、いわゆる「貧里」に迷い込んでいるという場面の出来言（デキゴト）である。述語は、本来、言葉が「言葉とは何か」を言うことができるようになる場面ようやく出現するのであり、忘却の場面に迷い出してしまうと、述語としてのその固有の働きを見失う。それは、つまり、述語が、主語の述語になってしまうということの意味する。今や、述語は必然的に主語を述語付けるようになるのであり、ここに、主語－述語関係が成立する。それゆえ、主語は述語と同じものということになる。なぜなら、述語は、もはや言葉を言う言葉として「言う」ことができなくなっていて、主語になっている述語と化しているからである。しかし、実は、このようになった述語にはある隠された動向が潜んでいる。それは、述語のこの境遇、すなわち、主語－述語関係から脱していかなければならないということである。これは、述語の固有なものであり、主語には知らせたくないことである。というのも、主語は、述語のこの願いが実現されれば、自身が消滅するからである。ところで、「主語－述語関係」においては、述語がみずからの本来為すべきことを忘れて、「主語の述語」に成り下がったために、主語の方が最初は、主人的になっていて、これに対して、述語は従者的である。主語に述語が従属する。そして、このような関係を表現している判断が「定在の判断」である。この判断においては、述語は、主語に「内属する」。しかし、述語は、自身の隠れた意図を言いたいのであるから、主語にたんに内属しているわけにはいかない。述語は、この関係を越えて、述語が主人となる関係性に帰っていかなければならない。これは、「主

語－述語関係」の中に「反省」の運動が起こるということであり、ここに「反省の判断」の思弁が可能になる。こうして、「反省の判断」では、述語は主語よりも支配的な力を持てるようになり、主語は述語に「包摂される」。次に、述語が自身に戻って来ると、そこでは、主語は述語であるということが措定されるようになる。つまり、主語と述語の同一性が措定されるようになる。この関係を表現している判断が、「必然性の判断」である。しかし、ここではまだ、あの述語の本来の願いがかなえられているわけではない。述語は述語の奥に自己否定を抱いているのであり、これが措定されるようになる判断が「概念の判断」である。ここに、判断の全体を否定するようなものが出てくることになり、同時に、この否定的なものが判断の根拠になるので、判断は根拠をもった判断となる、すなわち、推論に移っていくのである。

実際、当のヘーゲル『論理学』における判断論の思弁もこのようなlogos的运动をその可能性の根拠としているのであり、それゆえ、それは、たんにある特定の判断を取り扱ったり、また、判断の形式的区別を為したり、あるいは、抽象的に判断の論理を思考しているのではない。端的に、それは、主語－述語関係のlogischな本質を扱っているのである。つまり、ヘーゲルの判断論では、logos的なものがその可能性の根拠になりながら、それがlogischに表現されているのである。そこには、間接伝達論的論理学から可能である「主語－述語関係」の動向との驚くべき一致が見出されるのである。

さて、ヘーゲル「論理学」における判断の弁証法において、我々の立場から見て、論すべき箇所が「必然性の判断」である。言葉は、述語として本来言わなければならない言（こと）を言えなくなり、「貧里」に迷いこみ、「主語－述語関係」の場面でこの境遇に居ることを語る。今や、述語は、「主語の述語」となっ

ていて、自分が主語になってしまっていること、したがって、「主語は述語である」ということを語らなければならない。「主語－述語関係」のlogos的動向の中で、両者の同一性を言うことは、述語が固有に為さなければならないことである。このことを語りだすことが、述語としての述語に課せられている。したがって、logischな動向としてのヘーゲル「論理学」においても、述語は、述語の固有な責務としてそのことを語らなければならないのである。そして、事実、ヘーゲルの『論理学』でもそのようなことが論じられていて、それが、「必然性の判断」の箇所なのである。つまり、「必然性の判断」の弁証法こそ、間接伝達論的論理学との見事な一致が開示される必然的な「出会いの場」なのである。「必然性の判断」のlogischなものをlogos的に解明することによって、間接伝達論的論理学におけるヘーゲル「論理学」の位置づけがより一層深く確定されるのである。

3. 「必然性の判断」の解明

さて、「必然性の判断」を間接伝達論的な立場から照らし出しながら、「解明」することによって、すでに述べたように、その思弁の中に含まれているlogos的なものを示し、同時にその思弁の「意義」を開示しなければならない。この解明は、図式的に明確な説明とはなりえず、一見すると錯綜したものにならざるを得ない。なぜなら、かの「出会いの場」では、logischなものとlogos的なものの両者を分ける境が判然としなくなっているからである。しかし、両者には、その立場の違いからなんらかの意味で差異がなければならない。このような差異は、「解明」の進行の中から見えてくるようになるべきである。

我々は、以下、「必然性の判断」の思弁の運動をヘーゲルの『論理学』の叙述に従って検討し、間接伝達論的論理学からこの運動を照らしながら、当のヘーゲルの思惟の動きをよ

り明澄にし、logischなものの真相たるlogos的なものを明らかにする。ヘーゲルの立場では、logischなものとは、Begriff (概念) のことである。しかし、それは、間接伝達論的論理学の立場からは、logos的なこと、すなわち、述語において言われている言 (こと) である、言葉のある境遇である。

「必然性の判断」は、論理学の通常の用語では、「定言判断 (das kategorische Urteil)」, 「仮言判断 (das hypothetische Urteil)」, そして、「選言判断 (das disjunktive Urteil)」を意味する。これら三者は、主語と述語の同一性に係る判断である。

(1) 定言判断

定言判断というのは、一般的には、「AはBである」というものであるが、例えば、「このバラは赤い」というものではない。ヘーゲルによれば、「このバラは赤い」という判断は、「定在の判断」に属するところの「肯定判断」である。それでは、どのような例が挙げられるかということ、例えば、「バラは植物である」というのが定言判断である。主語は種としてのバラであることを言っているのである。これは、この定言判断が「反省の判断」の結果として出現したことからも理解される。例えば、「Aさんは死すべき者である」というのは最初は個別的な判断であるが、これは次に「若干の人間たちは死すべき者である」というように、量的に拡張されることを含んでいる。しかし、それは更に、「すべての人間は死すべき者である」という普遍性を含むものであることに拡張される。しかし、この「すべて」というのは、数が多いことではなく、すでに類的な人間という意味になっているのである。こうして、今や、「人間というものは死すべき者である」という判断となる。しかし、ここには、すでに主語が普遍的なものとして定立されていて、ここに主語と述語の同一性が現れている。「バラは植物である」と

いうとき、「バラ」という主語は、このような類的なもの、ここではバラという種であり、主語は述語の植物という類と同一のものなのである。したがって、定言判断においては、主語はすでに普遍的なものであり、述語と同一になっているのである。述語は主語の本質を言うのであり、その場合、主語はもう述語と等しいものとなっているのである。

しかし、定言判断においては、主語と述語の同一性は、述語の方が主となって措定されているのではない。つまり、そこでは、主語は述語である、となっているにすぎない。まだ、述語は、主語と述語の同一性を言っていない。すなわち、述語は、概念的な規定性をまだ持たないのである。故に、主語と述語の関係を表すコブラ、つまり、 $\langle A \text{ ist } B \rangle$ のistは、本来の意味での必然性とはなっていない、必然性はまだそこでは「内的」である。このところをヘーゲルは次のように言う²⁾。

「主語がそれによって述語に対してひとつの特殊であるところの主語の規定性は、さしあたってなおひとつの偶然的なものである。主語と述語とは形式、あるいは規定性によって必然的に関係してはいない。必然性はなお内的なものとして有る。」(S. 295)

主語の規定性にはなにか偶然的なものがあるのである。この偶然性は、主語と述語の同一性をまだ述語が語りえないということに起因する。なぜなら、もしも述語がこの同一性を語れるようになるなら、主語の規定は、必然的となり、偶然性が入り込む余地がなくなるからである。このことは、コブラがたんにまだ内的な必然性を言い表しているということである。「必然性の判断」の最初は、まだこのような段階であり、この段階が「定言判断」なのである。

(2) 仮言判断

仮言判断は、一般には、「AならばBである」という形式で表される判断である。そして、

Aはある判断であるとともに、Bもまたある判断である。たとえば、「もし春が来るならば、ウグイスが鳴く」あるいは、「もし彼が美食を過ぎれば、彼は健康を害する」などである。しかし、ヘーゲルによる仮言判断の形式的表現は次のようなものである。

「もしもAが有るなら、Bが有る、あるいは、Aの有はその固有の有ではなく、ある他者の、Bの有である。」(S. 295)

このヘーゲルの表現によるなら、仮言判断は、論理的なものというより、むしろ存在者の関係を言い表しているように見える。たとえば、ここに有るこの石はなるほどそれ固有の存在をもっているようである。しかし、それは、すでに大地に置かれていて、この大地がないなら、存在できない。とすれば、この石があるのは、ある他者、すなわち、大地の有に拠って有るということが言えよう。一体、これはどうして仮言判断なのであろうか。

定言判断においては、主語と述語の同一性は、なるほど、主語は述語であるという仕方ではなんらかの意味で措定されている。主語はもうすでにある普遍性をもったものとして立てられている。しかし、まだ、その同一性を、述語が言うようになったわけではなかった。したがって、主語と述語の関係の必然性はまだようやく「内的」なものでしかない。もしも、述語がその同一性を言うようになれば、主語はその述語の言っている当のものの全体であり、主語は述語と同じものとして立てられているにすぎなくなる。実は、こうなった判断が次に登場する「選言判断」である。仮言判断は、このような事態への過渡をなすのである。したがって、仮言判断は、述語が主語と述語の同一性を言うことへと途上にあることを言う判断なのである。このような関係は、ヘーゲル「論理学」の「本質」の領域において、ちょうど因果関係が相互作用へと移行する過程に対応する。主語がまだ述語から言われないうという面をもっているような必然性の判断

が仮言判断である。このことは、主語と述語の間に相互の有的な依存関係がまだあるということであり、これが判断の形式に表現されることになる。この依存関係が「もしもAが有るならBが有る」という表現で言われようとしていることである。この関係は、存在者の本質的關係とは異なることが理解される。すなわち、この表現は、すでに logisch な関係なのである。「主語は述語である」から「述語が主語である」への過渡を表すような「主語－述語関係」は、必然性の関係であるとともに相互のまだ有的な面を残す依存関係ということになる。それは、一種の、因果関係といえる。実際、ヘーゲルも仮言判断と因果性との密接な関連を次のように述べている。

「定言判断において実体性がそうであったように、仮言判断では因果性の関係がその概念の形式においてある。」(S. 296)

定言判断の主語は、本質的に、まだ必然的なものとはなっていなかったが、仮言判断では、主語はなにか他者と必然的な関係に入っていなければならない。この関係は、因果関係として「本質」の領域で指定されたものであるが、概念としては、主語と述語の同一性が述語において言われるようになるまでのある過渡ということになるのである。すなわち、仮言判断は因果関係にはまだ現れないその本来の概念の形式なのである。

その意味では、「もしもAが有るなら、Bが有る」というヘーゲルの挙げた仮言判断の形式的表現は、主語と述語との相互に照らしあうまだ有的な面を残している依存関係を言うものと理解されることができる。その場合には、それは、きわめて厳密な意味で仮言判断を表現しているということになろう。一見、存在の領域での関係を言い表しているかの「もしもAが有るなら、Bが有る」というヘーゲルの表現はむしろ極めて彫琢された仮言判断の形式的表現であると考えられるのである。

このように考えるなら、一般に仮言判断の

例として挙げられるものは、本来の意味での論理的关系ではないということになる。たとえば、上で挙げられた例、「もし春が来ればウグイスが鳴く」というものも、論理的なことと言われているのではなく、ある存在者の有り方、ないしは、現実の有り様を語っているにすぎないことが分かる。「春が来る」ということと「ウグイスが鳴く」ことの間に何か関係が、それも、ある種の必然的因果関係があることがそれとなく理解されるのであるが、この関係は、まだ論理的关系、すなわち、logisch なものとして把握されてはいないのである。ただ、なにかそうした因果の關係に論理が潜在しているように感じられているにすぎない。ウグイスが鳴くことは、春が来ることとある論理的关系にあるとしても、それは、まだせいぜい「因果関係」であり、この「因果関係」の論理的本質はまだ、明らかではないのである。ところが、「因果関係」そのものの論理的な根源性は、「主語－述語関係」の「仮言判断」にあるのである。そして、ヘーゲルが「仮言判断」をそのようなものとして思惟していることは明白である。

「もし春が来ればウグイスが鳴く」というのは、仮言判断の例としては実は、不適切なというより、ヘーゲル的に言うなら、「野蛮」な例示である。その中には、ある必然的関係があり、それは、因果関係と呼ばれるものである。しかし、この因果関係は、実は、まだ論理的な関係ではなく、その論理的关系は、「仮言判断」に存するのである。しかし、これは更に、主語と述語の関係を根底にしてい、て、まだ「言葉の言(こと)がら」、すなわち、logos 的にはなっていないわけである。このような「言葉の言がら」が「間接伝達論的論理学」である。logisch なるものは、logos 的となるべきなのである。ヘーゲル「論理学」は logisch なるものに到達しているのである。

仮言判断は、それにしても不可解な判断であることは確かである。なぜなら、通常、そ

れは、すでに見たように、少なくとも二つの異なる判断から構成される。ところが、これまで考察したように、それは、「主語－述語関係」における主語と述語の関係、その必然的関係を表しているからである。そうはいっても、例えば、「もし春が来れば、ウグイスが鳴く」という例において、「春」という主語と「来る」という述語、そして、「ウグイス」という主語と「鳴く」という述語の関係を問題にしているのではない。そうではなく、両者の判断における「もしも・・・ならば、云々」ということが主語と述語の必然的関係を表現しているということなのである。ヘーゲルの考えていることもそのような連関であることは明らかである。というのも、彼は、『哲学入門』の中で次のように言うからである。

「しかし、主語と述語とがまた区別されているかぎり、両者の統一性は、また対立するものの統一性としてすなわち、必然的関係として表現されねばならない。仮言判断」³⁾。

二つの判断からなる仮言判断は、実は、主語と述語の必然的関係、つまり、上で述べたような両者の相互の照らし合う関係を表現しているのである。

それゆえ、この判断の問題の核心は、次のようなところにある。主語と述語の同一性がまだ、概念的に措定されない段階で、つまり、主語と述語の同一性が述語で言われるようにはまだなっていない時、要するに主語と述語の間に相互に照らし合う必然性の関係が起きているとき、なぜ、それは、「もしも・・・ならば云々」という二つの判断の関係によって表現されるようになるかということである。それは、両者が必然性の関係にあるからであると答えられる。しかし、まだそれでは十分な説明にはなっていないように思われるのである。ヘーゲルのこの判断についての説明にある種の不明瞭性があるのもこのためである。我々は、以下、この核心的問題に触れてみたい。

主語と述語の本来の関係は、述語が言うようにならなければならない。これは、間接伝達論的論理学によって根拠付けられる。そして、実際、それは、次の「選言判断」によって遂行されるのである。述語が主語になっているということを述語が言わなければならない。しかるに、このことは、仮言判断の段階では、まだ、成就されていず、述語は、主語に映された自分を言うとともに、主語もまた述語に映されている限りでの主語となっているのである。こうして、主語の側に、述語の側との照らし合う関係で述語が言われ、述語の方に、主語の側に述語が映されているものであるかぎりの主語が立てられることになる。こうして、二つの主語－述語関係の間のまだ有的な面を残した必然的関係が、つまり、因果関係が成立するようになるのである。つまり、二つの判断は、相互に一種有的に独立的となっていながら、両者に必然的関係があるようになるのである。「春が来る」ということと「ウグイスが鳴く」という両者は、なにか独立している事象である。しかし、そこには、ある因果関係、必然的関係があるように思えるのである。そして、このような仮言判断の核心を表現する形式的表現がかのヘーゲルの表現である。春とウグイスという二つの有の間に必然的関係があるのであるが、それは、仮言判断がそこで言われているということなのである。主語と述語の関係のある段階、つまり、「仮言判断」が春とウグイスの「と」の奥義である。花が咲くと蝶が舞ってくるその不可思議な自然現象の底には、あるいは、我々が日々、さまざまなことや人に遭遇し、係わるというわけのわからぬ、しかも、運命的（必然的）現象の底には、仮言判断の論理学が、したがって言葉のことがらが潜んでいるのである。

(3) 選言判断

選言判断は、形式的には、「AはBであるか、

または、Cであるかである」と表現され、ヘーゲルもまたこの表現を用いている。

すでに上で述べたように、仮言判断は、この選言判断への過渡の段階を表す判断と考えられるのであるから、選言判断こそ主語と述語の同一性を本来的な仕方と言うところの判断ということができる。定言判断では、この同一性は、「主語は(実は)述語である」ということをいわば極めて直接的に言っていたのである。ところが、選言判断になると、「主語は、述語である」ということが、述語の方から語りだされるようになるのである。述語が主語になっていたのだとこの判断は教えるのである。これがどうして可能かは間接伝達論的論理学から照らし出されて明らかとなる。

言葉そのものは、「用意の秘術語」の内部領域では、言葉そのものを言うということになっていて、これは、「述語の可能性」と名付けられる。そこでは、まだ、主語が定立されていない。なぜなら、述語と言うことは、この「言う」ということであるから、そこに主語になるものが出てくることは有り得ないからである。ところが、この「用意の秘術語」の内部領域において言葉そのものが自己忘却を起こすことによって、言葉そのものは、「貧里」に迷い出し、ここに、述語は「主語の述語」となるのである。そして、言葉そのものが迷うこの場面がヘーゲル「論理学」の固有のエレメントになるのである。このエレメントにおいては、いずれ、言葉そのものが経験するこの事態が問われなければならない。実際、ヘーゲル「論理学」の判断の弁証法において、そのエレメントの基幹的な内容が考察されることになるのである。故に、ヘーゲル「論理学」の中でも、必然的に、主語と述語の関係は、述語の方に根源性があることが明らかにしなければならない。述語の側に起きていることが主語と述語の関係には本質的なこととして考えられるように出来ているのである。かくして、「必然性の判断」において

も、いまや、選言判断は、主語と述語の同一性を述語の方の事情として語りだすのである。

間接伝達論的論理学から見られる限り、述語はすでに「主語の述語」となっているのがあった。すなわち、これこそ選言判断そのものが語りだそうとすることの内容を成すのである。述語は、すでに、もう主語と述語に選言されていて(disjunctioとは「分離」という意味)、述語が主語になっている。一般に、選言判断の主語は類的なものである。例えば、「色は赤であるか赤でないかのどちらかである」という選言判断では、主語は赤などの種の最近の類としての色である。類は、普遍であって、述語となるものである。なぜなら、赤は色という普遍に属し、したがって、「赤は色である」となっているからである。ところが、述語は、主語と述語を選言しているいわば主体であって、この選言を為す行為者である。それは、主語を選言しながら、同時にこれをすでに規定されたものとして、すなわち、特殊(類に対する種に対応)として述語の中で自分を自分から排斥する(主語ではないということである=色一般でなく赤として)とともに、選言肢のどちらにも自分が否定的統一原理として有ることを主張することになる。これは、相互に排斥関係にある種を立ててそれらの関係を言うことになる。つまり、色は、赤であるとともに、赤とは異なる色、例えば黄色のなかにもその普遍的本質として有る。色は、赤であるとともに赤でないものでもある。しかし、赤という色は、他の色を排斥する、黄色は赤ではない。赤という種のこの排斥は、述語が主語になっていながらそれを拒否する否定性に根ざすものである。つまり、選言判断の中に、種の固有な本性がその根拠をもっているのである。こうして、述語の「Bであるか、または、Cであるかである」というのは、述語そのものがすでに主語となってしまうということ、主語と述語を選言しているということを言っているの

である。ヘーゲルの言葉では次のようになる。

「選言判断はさしあたってその述語の中で選言肢をもっている。だが、同時に選言判断そのものが分離されている。その主語と述語がその分離の両項である。」(S. 301)

したがって、同じことであるが、ヘーゲルは、選言判断のコブラは、指定された概念であるとも言うのである。もっとも、この判断においては、概念の三契機の中の個別性は、現れていない。それが現れるようになると、「必然性」の判断は、「概念の判断」に移行するのである。間接伝達論的論理学から見られるなら、「主語－述語関係」において述語の側に起きている消息は、述語が主語になっているということであり、同時に、述語はこの関係から脱出しなければならない。それは、述語自身のなかに自己否定的な面が措定されることであり、普遍性の否定、つまり、個別性が措定されることである。述語が主語になっているということを語る選言判断の述語の中には、まだ、このような意味の個別性、つまり、述語の根源的否定性は、現れていないのである。故に、選言判断は、まだ、主語と述語の同一性を語る判断、すなわち、「必然性の判断」の中に属しているわけである。もしも、述語の中に述語の根源的否定性、つまり、概念の個別性の契機が現れるようになると、それは、単に述語に否定辞が付く(AはBであるのではない)ということではなく、判断そのもの、「主語－述語関係」そのものに対する根源的否定がされるのであり、逆に判断そのものがそこから可能になるような根拠が現れてくるのでなければならない。つまり、「概念の判断」は、推論への過渡になるのである。いってみれば、コブラのistに対して、その否定的根拠が生じてくるわけである。これは、ある判断が「何々である」と判定するその「である」ということに対する一種の判断基準ないしは、判断根拠が問われることになることを意味する。断定的に判定したの

か、疑問的に判定したのか、必然性をもって判定したのか、ということが判断において語られるようになるのである。これが、「概念の判断」の三つの区分を構成する。すなわち、「断定的判断(一般には確然判断)」、「問題視的判断(一般には蓋然判断)」そして、「反論の余地のない判断(一般には必然判断)」である。このような「概念の判断」は、すでに、「選言判断」において、その述語の中にも暗示されているのである。なぜなら、その判断では、述語は主語になっているのであるが、述語のほうには、この主語を特殊として否定する動きとしての種の排斥が示されているからである。ここにかの根源的否定性が現れている。ただ、それは、述語において措定されているにすぎず、まだ、本来の根源的否定性、つまり、個別性としてコブラの中に登場するまでに到っていないのである。主語と述語の同一性を表すコブラの中に否定的なもの、つまり、疑念が生じてくると、判断は、istの根拠を問うようになり、やがて推論へ移っていくのである。その場合には、判断形式の中に概念の個別性の契機が登場することになる。

さて、ここでヘーゲル「論理学」のこの選言判断に関する考察の中には、論じられていないことについて考えてみたい。仮言判断のところでそれが因果関係と関係することは、ヘーゲルも考察をしているのに、なぜか、選言判断のところでは、相互作用との関係について一言も言及されていないのである。これは、『エンチュクロペディー』においても、また、『哲学入門』においても同様である。

主語と述語の同一性が選言判断においては、述語において語りだされている。したがって、すでに述べたように、選言判断においては、本質的に、主語と述語が選言肢である。述語が主語になっている(述語が主語を選言している)ということがこの判断で言われていることである。しかし、そこには、まだ、根源的否定性は措定されていない。いいかえれば、

この判断はまだ概念自身に到達していないのである。しかし、それは、因果関係よりもっと概念に近づいた必然的關係ということになる。これが、相互作用に他ならない。

先の例でいうなら、「もし春が来れば、ウグイスが鳴く」ということには、その逆の「もしウグイスが鳴くなら、春が来る」とは言えない面がある。普通我々は、ウグイスが鳴いたから春が来たのだとは考えない。むしろ、春が来たからウグイスが鳴き始めたのだと考えるのである。ここに、順番があることになり、これが因果関係を特徴付けている。この関係は、必然的關係ではあるが、すでに述べたように、まだ論理的関係ではなく、論理的には、仮言判断という一種途上性のある論理が根になっていた。ところが、よく考えると、「もし春が来ればウグイスが鳴く」の中には、「ウグイスが鳴くから春が来る」という面も含まれていることが分かる。なぜなら、春は、ウグイスが鳴き、スマレが咲き、虫が花に集まり、梅の花が咲き、等々、これら全体によって成立しているからである。これら全体の事象が相互に関係することを我々は春と名付けているのである。力学でも、作用と反作用が認められ、これが相互作用と呼ばれる。また、人間関係も相互作用である。しかし、相互作用もまだ必然的關係とは言えるが、論理的なものではない。それは、しかし、因果関係のある種の一面的な見方を一歩論理的関係へと進めたものであり、その論理的な根が選言判断なのである。なぜなら、そこでは、すでにもうその述語の中で概念的な同一性が語りだされているからである。

しかし、選言判断が相互作用と関係すると言及するには、選言判断は、余りに論理的になっている。つまり、仮言判断は主語と述語の同一性に関し、途上性であるために、それと因果関係とはよく調和して論じられ得るのであるが、選言判断においては、すでに途上性が解消されているため、とりたてて、「本

質」の領域の相互作用との連関を論ずるに及ばないのである。選言判断は途上性がなくなったのだから、それ自身の論理的事実を語るだけでよいのである。この理由によって、ヘーゲルも選言判断と相互作用との論議上の調和を見出せなかったと考えられる。しかし、ヘーゲルは、このような事情を根拠付けて語ることはできないに違いない。なぜなら、この事情の暗がりを照明するには、間接伝達論的論理学が開かれていなければならないのだから。

科学の基盤となる因果関係と相互作用の論理は、主語と述語の同一性に根があり、これは、間接伝達論的論理学からその可能性の根拠を与えられているのである。素粒子や原子、分子の間に働く相互の必然的關係のもっとも奥には、「言葉のことがら」があり、間接伝達論的論理学がそれを支えているのである。このことはまだいかなる人間にも知られなかったことである。しかし、ヘーゲルの眼差しは、この暗がりの中に潜む論理的なものの、つまり、logischなものを捉えているのである。

さて、選言判断の固有な本性を、次のヘーゲルの言葉が、極めて簡潔に言い表している。

「選言判断の中で概念は、普遍の本性とその特殊化との同一性として措定されていた。これによって、判断は止揚されたのである。」(S. 302)

「必然性の判断」は、本質的に主語と述語の同一性を語るものである。しかし、この同一性は、いまや、選言判断において述語が語るようになったのである。ここで、主語と述語の分裂は、述語のことがらになり、主語－述語関係の本質が言い出され、判断は止揚されたことになる。しかし、実は、まだ述語の中には語りだされていないことがある。それは、すでに述べたように、述語が自身の根源的否定性を十分には語っていないということである。「主語－述語関係」がどうしてそういう関係になったのかを述語のほうから語りだす可能性が残されている。述語が、主語を取っ

て、「主語－述語関係」において、どうしてこの関係を取るに到ったのかを語るという仕事が述語には残されているのである。そのかぎり、判断は、まだ止揚されていない。判断は、次の「概念の判断」に移行するのである。「概念の判断」はそれゆえ、本質的に、判断そのものを述語が土台から、述語の地底から揺り動かす判断と言える。判断の地震である。そこでは、流動するマグマ、「概念」が動き出しているのである。

以上、この論文において logisch なものが logos 的に解明された。

注

- 1) 清水茂雄：西田哲学における国家論について。哲学論集，第52号，23頁～38頁，2005年。
- 2) 以下，ヘーゲル『論理学』からの引用は，次の版に拠った。本論の各引用の末尾にこの版のページ数を記した。
G.W.F.Hegel:Wissenschaft der Logik II, Philosophische Bibliothek Bd.57, Felix Meiner, Hamburg, 1975.
- 3) G.W.F.Hegel Werke in 20 Bänden, Suhrkamp, 1986, Bd4, S.148.